



「見たり、聞いたり、探ったり」No.216

通算 No.368

青 木 行 雄

能登國一宮

けただいしや けただいしや
気多大社に参拝(石川県羽咋市)

能登にこんな神社があることを知らない人も多いと思う。最近能登も大変便利になった。新幹線が能登の玄関口金沢まで延びた。そして飛行機も能登中心地穴水町に「のと里山空港」2003年(平成15年)7月7日に開港した。そんなことで能登の珠洲市狼煙灯台にも気軽に行けるようになった。1泊2日で1周が出来て能登の見どころは十分堪能出来たのである。

今回は上記の「^{けただいしや}気多大社」を取り上げてみた。

「いしかわ百万石物語」

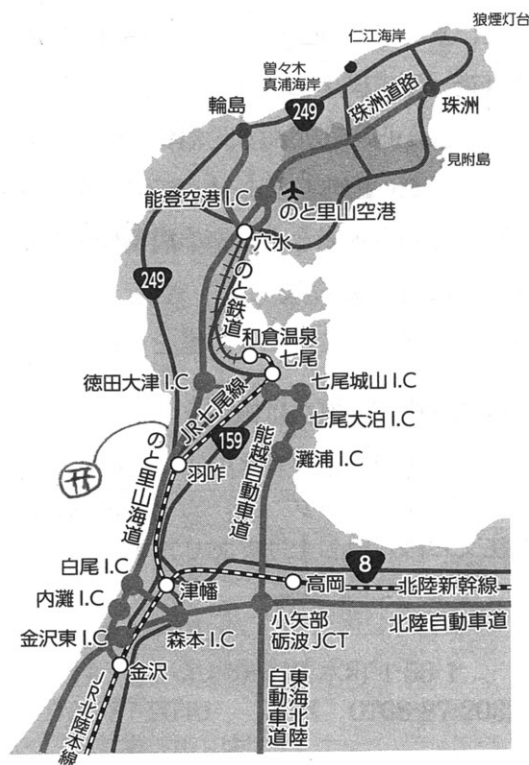
「前田利家」と「まつ」が祈願したという。

能登國一宮

741年(天平13年)能登国が越中国の一部であった時代、越中国の一宮は現在の気多大社であった。気多大社が中央の文献に初めて見えるのは『万葉集』であるという。748年(天平20年)、越中守大伴家持が出挙のため能登を巡行したとき、まず本社に参詣して、「^{しをち}之乎路から^{ただこ}直越え来れば^{はくい}羽咋の^{あさな}海朝風^{かねかち}ぎしたり船楫もがも」(志雄街道をまっすぐに越えてくると、羽咋の海は朝風している。舟と櫓が欲しいものよ)と詠んだ。本社がいかに重んじられ、のちに能登の一宮となる神威を当時すでに有していたことがわかる。

北陸の一角にありながら朝廷の尊崇が厚く、神階も累進して859年(貞観元年)には正二位勲一等から従一位にのぼっている。このような国家の厚遇は、東北経営、あるいは新羅や渤海を中心とした対外関係とも無縁ではなかった。能登半島の要衝に鎮座する気多大社の神威が中央国家に及んでいたのである。

近年、南方800メートルの地に発見された寺家遺跡は縄文前期から中世にわたり、大規模な祭祀関係の出土品や遺構類は気多大社とのかかわりあいをしてのばせる有力な



資料となっている。

延喜の制では名神大社に列して祈年の国幣にあ
ずかった。「神名帳」によれば、気多神社と称するも
のが但島、能登、越中、越後(居多神社と称する)に
あるほか、加賀には気多御子神社があり、国史見在
社として越前に気多神社がある。日本海沿岸に広く
気多の神が祀られていたことを知ることができ、古
代における気多大社の神威がしのばれる。

能登の守護畠山氏の社領の寄進、社殿の造営など
が見られる。今も遺る摂社若宮神社(国指定重要文
化財)は畠山氏の再建で、石川県の中世建造物とし
て重視される。

近世は、前田利家をはじめ歴代の藩主が崇敬し、
社領350石を寄進したほか、祈願、祈祷はもとより
しばしば社殿の造営をした。本殿(大己貴命)、拝殿、
神門、摂社若宮神社(事代主命)、摂社白山神社(以
上国指定重要文化財)、神庫、隨身門(ともに県指定
文化財)がそれである。

加賀藩の保護した社叢(国の天然記念物)には奥
官が鎮座し、「入らずの森」と呼ばれる聖域となっ
ている。1983年(昭和58年)5月22日、全国植樹祭に
御来県(県)の昭和天皇が本社に行幸され入らずの森に
踏み入られ「斧入らぬ みやしろの森 めずらかに
からたちばなの 生ふるを見たり」と御製を詠
まれました。昭和天皇は、決してみだりに採取など
なさらず、それぞれの植物が平穏に存続をつづけ、
その場所の植物相がいつまでも変わらないように
とお祈りになっておられるからである。「斧入らぬ
みやしろの森」はそのおよこびなのである。1871
年(明治4年)に国幣中社、1915年(大正4年)には
国幣大社となり、現在も北陸道屈指の大社として知られるという。

どこの神社にもいろいろとめずらしい、しきたりや伝統行事があつて、その国地方の特別な祭等がある。
この気多大社の「鵜祭」も重要無形民俗文化財に指定されていて全国でも珍しい祭りだ。

毎年12月16日未明の神事であるが、これより前、遠く七尾市の鵜浦町で生け捕った1羽の鵜を、同地の



※気多大社 大鳥居。木造りである。



※神門(国の重要文化財)。



※気多大社配置図。うちのグリーン分が「入らずの森」原生林として国の天然記念物に指定されている。

鵜捕部3人が鵜籠に入れ、2泊3日の道中をして14日の夕方ごろ神社に到着し、鵜は餌止めとなる。鵜は生け捕られた瞬間から神となり、鵜様と呼ばれ、道中では民衆が「鵜様を拝まらずに新年は迎えられん」と手を合わす。

そして前記の神事となるわけだが、16日の午前3時過ぎ神社で祭典となり、祝詞奉^{のりと}上、撤饌^{てっせん}がすむと、本殿内の灯火だけを残して消灯し、四辺は暗黒となる。鵜捕部が鵜籠を本殿前方に運び、神職との間に問答がかわされる。やがて、「鵜籠を静かにおろし、籠をとりすて、鵜をその所に放てと宣い給う」とおごそかにいわれると、鵜捕部は鵜籠の鵜を本殿に向かって放つ。鵜は本殿の灯火をしたって昇り、殿内の台にとまると取り押さえられ、海浜に運ばれて放たれる。鵜は闇空に飛びたち、行くえも知れず消えさるのである。この鵜祭の由来は明らかでないというが、神社の所伝によれば、祭神の「大国主神」が神代の昔、初めて七尾市鵜浦町の鹿渡島に到着したとき、同地の御門主比古神が鵜を捕らえて捧げた故事によるとか、あるいは同地の櫛八王神^{くしやたまのかみ}が鵜に化して海中の魚を捕って献上した故事にもとづくという。神秘的な行事ではあるが、気多大社の年中祭祀上から大観すると、新嘗祭^{にいなめさい}(11月23日)中の神事だったのである。

当夜、鵜の神前への進み具合によって年の吉凶を占う習俗があったようだ。

加賀藩祖の前田利家は、鵜祭の行事を重んじ、1585年(天正13年)に鵜捕部へ鵜田三友を寄進しているほどであるが、鵜祭の鵜が例年にまさって神前によく進んだことを聞き、「国家之吉事、不可過之候」(能登国にとり、これ以上縁起のよいことはない)と喜んだ書状が大社にあるという。この神事を脚色した能「鵜祭」があるが、加賀藩祖、前田利家がひいきにしていた金春流でもっぱら演じられているという。

石川県の七尾市の所口町にある気多本宮へ渡御する大規模な神幸祭で、現在は3月18日から23日まで、羽咋、鹿島郡内2市5町を回る。神輿の長い行列が早春の能登路を巡行し、一般には「おいで祭り」と呼ばれ



※神門の入口にて巫女から神社の説明を受ける参拝者の人々。



※改装中の拝殿(国の重要文化財)。今は仮拝殿が別あり、見ることも拝むことも出来ない。



※拝殿の奥を見てもわからない。御神燈が見えるだけ。本殿の1787年(天明7年)江戸時代の造営で230年程前になる。

ている。沿道には人々が集まり、神幸を迎える。私は行って見たことはないが、「寒さも気多のおいでまで」といわれ、神が民衆の中においでになり、一体となる能登の春まつりとして親しまれているという。

注目したいのは、往路の21日、中能登町金丸の宿那参神像石神社に1泊し、翌日同社の少彦名命が神輿に同座して七尾の気多本宮に赴き、1泊して祭典を営んでから帰途につくことである。気多大社の大国主神が少彦名命とともに能登を平定した住時をしのお行事だといわれている。

帰社した神輿は4月3日の例大祭まで拝殿に安置され、平国祭がそれまで連続していると伝える。例大祭には境内で蛇の目の的を神職が弓で射、槍で突き、太刀で刺す行事があり、祭神が^{おうちがた}邑知潟にすむ毒蛇を退治した状況を模したものと説かれているが、古記録によれば、^{やぶさめ}流鏑馬神事が^{かちゆみ}歩射となったものであることが知られるという。

1988年(昭和63年)からはその流鏑馬神事が450年ぶりに復活され、古式に従って執り行われた。平国祭は気多大社鎮祭の由来を伝える重儀で、祭祀の性質としては祈年祭に属するらしい。

少々、社パンフにより詳しく記してみたが、概要を説明すると、

気多大社は能登半島の付け根で^{はくいし}羽咋市北方の日本海に面して鎮座する。祭神は^{おおなむちのみこと}大己貴命は出雲から舟で能登に入り、国土を開拓したのち守護神としてこの地に鎮まった神とされる。古くから北陸の大社として知られ、中世・近世には歴代の領主から手厚い保護を受けている。

現在は本殿など5棟の社殿が国の重要文化財に指定されているほか、国の天然記念物、「入らずの森」が知られるようである。



※この奥が「入らずの森」入ることが出来ない。



※この奥が、これより「入らずの森」の看板が立っている。



※「入らずの森」を外から写す。



※「入らずの森」の入口の所。



※神事。おまつりの行列。

祭 神 は、^{おおなむちのみこと}「大己貴命」

所在地 〒925-0003 石川県羽咋市寺家町71-1

TEL. 0767-22-0602

能登國一宮「気多大社」

別名 気多大神宮

本殿の様式 三間社両流造檜皮葺

私の参拝時は改装中でシートでおおわれ、残念ながら外装も内社も拝見出来なかった。



※神事。おまつりの行列。林間の道を通る神馬の列。

特に他神社には見られない、本殿境内裏手に1万坪もあるという「入らずの森」と名づけられた天然自然の森がある。まったく立ち入り禁止で神の宿る原生林だと言う。木はタブの木、シバキ、シイ、クスノ木、カラタチなどの常緑広葉樹が密生し、樹齢何百年もの木が林立している。国の天然記念物に指定されているというが^{さく}作の近くまで行き、密林を外から見て来た。

「入らずの森」の祭りがある。

年に一度宮司のみがこの森の中にある奥宮に入り「^{すさのおのみこと}素戔鳴尊」と「^{くしいなだひめ}櫛稲田姫」の二柱の神様より元気な気を頂いて1年で衰えた気を一新して新しい年を迎える。

入らずの森の奥宮例祭

「気の葉祭」が1年に一度行われるらしい。

全国の神社仏閣等数多く見ている所から、最初見た時は重視しなかったが、見れば見る程、調べれば調べる程奥ゆきの深い神社である事がわかる。「入らずの森」などはその例であり、頼めば社内を^{みこ}巫女が案内してくれる。そして能登は珍しい見所も多く、交通も便利になり、身近になった観光地と言える。

平成30年1月21日記